
日本有機農業研究会 2010年度第2回市民公開研究会
「有機農業運動に息づく協同組合思想」
— 「提携」 — 楽思想と賀川豊彦 —



【日時】 2010年7月17日（土）12:00～16:00

【会場】 賀川豊彦記念松沢資料館（東京都世田谷区上北沢3-8-9）

【進行】 資料館案内、賀川豊彦ビデオ上映、講演、討議

【講師】 **加山久夫さん**（賀川豊彦記念松沢資料館 館長）

森田邦彦さん（元協同組合経営研究所・日本有機農業研究会会員）

（第2回研究会のねらい） 魚住道郎（日本有機農業研究会副理事長）

（司会進行・問題提起） 若島礼子（安全な食べ物を作って食べる会）

【主催】 日本有機農業研究会



賀川豊彦記念・松沢資料館

〒156-0057 東京都世田谷区上北沢
3-8-19 TEL. 03-3302-2855



【講師プロフィール】

加山久夫（かやま ひさお）

1936年大阪生まれ。

賀川豊彦記念松沢資料館館長

日本基督教団横浜上倉田教会牧師

明治学院大学名誉教授

主著：賀川豊彦『友愛の政治経済学』（2009年 訳本）

『使徒行伝の歴史と文学』

『ルカの神学と表現』（1997年）

『神学と暴力ー非暴力的愛の神学をめざして』（共著 2009年）ほか。

森田邦彦（もりた くにひこ）

1936年 専業農家の長男として北海道・篠路村に生まれる。

1960年 北海道大学農学部卒業後、農林中央金庫（本店）に就職。本店のほか4支店に勤務。

1980年～1983年 日本協同組合連絡協議会(JCC)からの派遣職員として、国際協同組合同盟（ICA）ロンドン本部に勤務（出向）

1986年～1991年（財）協同組合経営研究所に勤務（出向）。この間、日本有機農業研究会の常任幹事を兼務（理事長 一楽照雄～天野慶之）

1989年 農林中央金庫を退職

1990年 生協コープかながわ（本部）、ユーコープ事業連合に勤務

1996年 病（胃癌）を得たのを機に退職

現在 ロバート・オウエン協会理事、日本協同組合学会会員、日本有機農業研究会運営会員、NPO法人 鎌倉広町の森市民協議会 常任理事（事務局長）
鎌倉市が取得した緑地での里山づくり（田、畑）を有機農業で実践している。

主著 『生命系の経済学』（1987年共訳、お茶の水書房）

『21世紀の経済システム展望』（1999共訳、日本経済評論社）

【資料】

- はじめに 本年度第2回「市民公開研究会開催にあたって 賀川豊彦と一楽照雄」
日本有機農業研究会副理事長 魚住道郎 P4
- 加山久夫「農政家としての賀川豊彦：「精神」に立ち返り 変革の運動 現場から」
2010年1月10日付 日本農業新聞 新たな協同－先人の思想から P7
- 加山久夫「賀川豊彦献身100年プロジェクトと『友愛の政治経済学』」
ロバート・オウエン協会年報34 2009年 P8
- 森田邦彦 本講演会レジュメ 「有機農業に息づく協同組合思想」 P14
- 森田邦彦編 「協同組合組織団体の変遷」（講演参考資料） P16
- 森田邦彦「社会的経済と協同組合についての雑録」
ロバート・オウエン協会年報29 2004年 P18
- 勝部欣一「人間賀川先生のきれぎれのおもい」『雲の柱』4 1985年秋 P21
(解説 魚住)
- 小南浩一「賀川経済論の思想史的背景－ラスキンとプルードンを中心に」 P24
賀川豊彦学会論叢第15号 2007年6月 (解説・提案 若島)

【一楽照雄】

- 一楽照雄『暗夜に種を播く如く 一楽照雄－協同組合・有機農業運動の思想と実践』
(財)協同組合経営研究所 発行 (社)農山漁村文化協会 編集発売 (2009年)より P42
- 第一部
- I 自立・互助 － 基本にすえた命題
- V 運動 2 理念としての自立・互助
- 3 運動の情熱は抵抗の精神
- 4 協同組合の本質的な性格
- 第二部
- V 有機農業運動・初期の活動
- 日本有機農業研究会 結成趣意書 (1971年) P62
- 生産者と消費者の提携の方法 (提携の10か条) (1978年) P63

はじめに

「有機農業運動に息づく協同組合思想——楽照雄と賀川豊彦」 日本有機農業研究会 第2回市民公開研究会開催にあたって

日本有機農業研究会副理事長
魚住 道郎

昨年「献身100年」を迎えた賀川豊彦と、日本有機農業研究会の創始者である一楽照雄に接点があったのか？

きっとあったに違いないとの確信を持って、それぞれの年表をさぐっていく内に、国際協同組合同盟（ICA）の国際会議に二人がいっしょに出席していることを、賀川豊彦記念松沢資料館の資料の中でつきとめた（2009年秋）。

1958年1月、ICAの第1回アジア協同組合会議がマレーシアで開かれたが、勝部欣一「人間賀川豊彦先生のきれぎれのおもい」（「雲の柱」第4号、1985年秋）の記事とあわせて、賀川豊彦写真集の中に、アジア会議に向かう飛行機に乗り込もうとする一行の写真に二人が写っていた。

両者は生協、農協に身を置く、それぞれの第一人者であったから、二人の接点はある意味当然であるといえればそれまでだが、この発見に身震いがおきた。

2010年1月10日付けの日本農業新聞「新たな協同—先人の思想から」のコラムに、『農政家としての賀川豊彦—「精神」に立ち返り変革の運動 現場から』と題した、賀川豊彦記念松沢資料館館長の加山久夫氏の記事はたいへん興味深い。

その中で氏は、

「賀川は1921年に杉山元治郎らと共に日本農民組合を立ち上げたとき、彼は労働運動の指導者として苦闘していたころであり、貧しい都市労働者を生み出す農村の貧困問題の解決が急務であるとの切実な思いがあった。特に農村人口の大半を占める小作農民の問題は深刻であった。個々の農民が解放されるためにも、自立と共助に基づく組合運動によって農村そのものを改良する必要を訴えていた。その後の普選運動や無産政党樹立運動にしても、貧しい一般庶民の声を国政に反映させるためにほかならぬ。これらはすべて「防貧策としての社会運動」であった。」

加山氏は、この「公正な社会」をめざしての世直し運動としての「下からの」協同の精神を、今日の「協同組合」組織の中に持ち得ているのか否かを問う。

「誤解を恐れずに言えば、戦後の農業協同組合はいわば「上からの」協同の働き掛けの趣があったのではないかと思う。賀川はしかし、基本的に「下からの」協同を目指したといえよう。とすれば戦後農協は賀川と非連続的であるとしても、その精神や理念において、むしろ戦前の農民組合運動との連続性を回復することが求められていると思うがどうであろうか」と結んでいる。

一方、わが日本有機農業研究会の創始者一楽照雄は、賀川との対比でどうであったか。以下一楽照雄の略歴を記す。

1906年徳島生まれ。1930年東大卒業後、産業組合中央金庫に入る。1945年より農林中央金庫に。1958年全国農業協同組合中央会理事に就任。同年常務理事に。1965年中央会常務理事を辞任。同年3月協同組合経営研究所理事。1966年同研究所理事長に。

1971年、日本有機農業研究会設立、幹事に。事実上の創始者、1984年同代表幹事に。1987年代表を辞任、顧問となる。1994年2月3日、87歳の生涯を閉じる。

加山氏から見れば、一楽照雄は戦後の農業協同組合のいわば「上からの」協同の働き掛けの最高位のポジションにいた訳であるが、戦前の産業組合中央金庫時代、世界恐慌の波を受け、疲弊のどん底にあった農家とともに、情熱的に取り組む産組役職員の姿、また農家と産組とが共有する運動精神、相互扶助による自立更生を掲げた産組運動、そこに協同組合理念の原点を見たのではなかったか。（一楽照雄『暗夜に種を播く如く』P130）

加山氏の指摘の通り、戦後の農協は国家とGHQの指導のもとに作られたもので、「下からの」自主的な協同精神を醸成して作られた組織ではなかったため、名前は協同組合と冠していても、同業者の利益を目的とした組織の域を出ていないし、そこからは一楽が言う「自立・互助」の精神は芽生えなかった。戦前の産業組合からの精神、理念は継承されなかった。

戦後の急速な近代化、効率化、他の産業との競争が激化する中で、食べものの安全性やその栄養的質もだんだんと低下していった。農薬の汚染、地力の低下など、近代農業の弊害が出始めた頃、農協中央会を辞している。

近代という巨大タンカーに乗ってしまった全国の農協を、その中央会に身を置く一楽にして、もはやその舵取りをすることはできないと感じたに違いない。

その後18年間にわたり、協同組合経営研究所に身を置くが、その前期5年間は、農協、漁協、生協がともに参加する唯一の研究機関に育て上げ、運動の本質、原理の探求をし、その後期には有機農業運動へと踏み込んでゆく。

一楽は、戦後のわが国の協同組合運動のなかには、公正な社会、公正なる経済分野を建設するという考え方が抜け落ちていると指摘し、前述の問題を解決するには生産者と消費者の現場からの農業の立て直しをするしかないと考えた。1971年、日本有機農業研究会を立ち上げ、生産者と消費者が共に支え合う、いわゆる「提携」の中に、「下からの」協同の精神・理念を模索した。一楽はこの「提携」による有機農業運動を「世直し運動」として提唱した。

この「提携」活動を、私たちはその後40年地道に続けてきた。そしてこの「提携」は、世界の有機農業を实践する生産者と消費者との取り組みのモデルとなり、新しいコミュニティー作りへと発展しはじめたところである。

賀川一楽思想に見られる「自立と相互扶助」の精神を背負いながら、日本有機農業研究会「提携」40年の歴史的实践運動（協同の社会実験）は、私たちの足もとを見つめ、固める「自給農縁」運動として展開し、生産者と消費者の壁を越え、双方が支え合い、協力し合う中で、食べものを自給していく拠点を、流域につくろうという方向性を打ち出せた。またその流域の視点から上流域、下流域の森・海にもこの考えを広げ、今、日本有機農業研究会では有機農業運動はもとより、腐植がつなぐ有機農林水産プロジェクトとして、森・里・海の流域に暮らす人々が「縁」という人と人との強い絆で結び合い、「森縁」「里縁」「海縁」を、流域住民との間に展開し、新たな協同社会を作ることを提案するところまでたどりついた。

この提案は、これまでの既存の協同組合にどれだけの理解と連帯性があるかが問われてくる。この連帯の醸成の中で地域の自然循環は改善と回復と再生され、人と人の絆も生まれてくると思われる。

今回、偉大な賀川豊彦と一楽照雄の思想と実践を学ぶ機会を頂いたことを関係者のみなさんに深く感謝し、先人の思想を背負いながらも、楽しく、心豊かに有機農業運動を社会の変革の基軸に据え、平和で公正な社会を目指したいと念じているところです。

(2010. 7. 17)



- 1958年1月、ICA第1回アジア会議に出発する(?)日本代表团
1月17日羽田発、3日クアラルンプール着 3日間の大会
団長：賀川豊彦（日本生協連会長）
副団長：荷見安（全国農協中央会会長）
片柳真吉（全国漁協連会長）
一楽照雄（農協中央会）、田中俊介（生協）十二村吉辰（炭労）
合同事務局長：勝部欣一（日生協組織教育部長 当時）
ほか計13名。

※このアジア大会は1954年パリ国際共同組合会議で、日本が呼びかけ提案して開催されることになった。

●”Co-operation is Fire”

第一日目総会にて賀川が演説。「人類の平和を守るためには、協同組合運動こそキーポイントになる。協同組合運動をすすめるためにはファイア(火)こそ必要である」

●賀川、中国加盟を勧告

中国は政治のめざす方向が違うとして加盟承認をしぶるICA幹部に対して賀川は、「生協の精神は中国にもある(合作社)。政治的信条の如何にかかわらず、アジア全体の力で協同組合運動をすすめるためには加盟問題には当然思想を越えてあたるべきです」と答えている。



農は国の基であり、農民は国の宝である



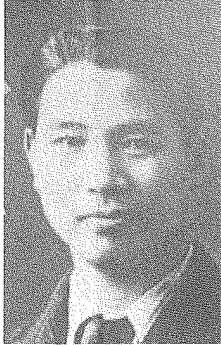
賀川豊彦記念 加山久夫氏
松沢資料館館長
かやま・ひさお 明治学院大学
名誉教授。賀川豊彦「友愛の政治
経済学」(訳本)ほかキリスト教
学関連著書多数。

第25回JA全国大会で「新たな協同」が提唱された。市場主義優先の経済で社会のつながりが断ち切られ、人々が孤立し、不安な状態に置かれている。賀川豊彦や二宮尊徳、大原幽雪など、今日の協同組合に影響を与えた先人の思想を研究者らから学び、協同組合の進むべき道を探る。

「農政家」というものがあるとする。賀川は正に農政家であった。日本の二宮尊徳、デンマークのグルントウィヒに並ぶべき農政家であった。そしてその人物、事業から

新たな協同
—先人の思想から

農政家としての賀川豊彦



JAのページ

「精神」に立ち返り
変革の運動現場から

見れば、賀川は尊徳より「新たな協同」が提唱された。市場主義優先の経済で社会のつながりが断ち切られ、人々が孤立し、不安な状態に置かれている。賀川豊彦や二宮尊徳、大原幽雪など、今日の協同組合に影響を与えた先人の思想を研究者らから学び、協同組合の進むべき道を探る。

「農は国の基であり、農民は国の宝である」と賀川は、農民は正に農政家であった。日本の二宮尊徳、デンマークのグルントウィヒに並ぶべき農政家であった。そしてその人物、事業から

り聞かない言葉であり、指導者として苦闘していた。賀川は、農民は正に農政家であった。日本の二宮尊徳、デンマークのグルントウィヒに並ぶべき農政家であった。そしてその人物、事業から

JA茨城
市販
「県JA」に販売シ
編の実践に
目下実践文